

# 障害者とのコミュニケーションに対する理解・関心を高める講義のあり方に関する一考察

— 一般大学生を対象とした講義における質問紙調査から —

和田 充紀

The Research about How to Teach Lectures to Understanding and Interest in  
Communication with Disabilities:

Questionnaire Survey of the awareness for College Students

Miki WADA

大学卒業後に教育や医療福祉等以外で働く社会人を目指す一般大学生にとって、合理的配慮の必要性について理解を促すことや、障害の理解・啓発のための講義や実践は必要な知識であり、求められる資質であると考えられる。そこで本研究では、一般大学生にとって合理的配慮の知識や障害への理解促進に役立つ講義内容や方法について、特に、障害者のコミュニケーションの中で手話実技による授業を行うことの効果、また、具体的にどのような方法が有効であるのかについて、受講学生の意識の変容や感想を通して検討した。

講義の内容に手話実技を取り入れたことで、手話そのものに対する関心が高まるとともに、聴覚障害者や特別支援教育への関心も高まった。また、障害や手話について学びたいという意欲や、学んだことを実生活に生かして障害者とのコミュニケーションを取りたいという意欲にも高まりが見られた。

今後は、他の障害の理解にもつながる講義内容や方法についての検討が必要である。

**キーワード：**合理的配慮、特別支援教育、障害、コミュニケーション、手話

**Key words :** Reasonable Accommodation, Special Support Education, Disabilities, Communication, Sign Language

## I. 問題と目的

平成28年4月から施行された「障害を理由とする差別の解消の推進に関する法律」では、障害者や障害のある子どもに対し、不当な差別的取扱いの禁止と国や地方公共団体等に対し合理的配慮の提供が義務化され、民間事業者についても合理的配慮の提供が努力義務として盛り込まれた。また、それ以前から、多様な場において障害の理解や支援体制整備に向けて様々な取組や活動が行われてきている。

教員養成系大学においても、障害の理解・啓発のための講義や実践などが多く行われている。例えば、都筑・小田・青柳・岩田・相羽・吉田(2015)は、講義・

演習等において障害の理解・啓発等を目的として行っている体験学習の実践を紹介し、「合理的配慮の知識を備えた教員を輩出していくには、社会的障壁の除去の理念・方法を学ぶ必要」があり、教員養成においては、「体験学習を行っていくことにより障害に関する理解を促進する教育課程を編成していく必要」があると指摘している。

一方で、啓発の対象は教育や保育、医療系の専門職が中心であり、一般社会人への啓発や理解の推進はまだ十分とは言えないという指摘も多い。高原・津田(2012)によると、「教育や医療福祉等以外で働く社会人に対して発達障害に関連する用語の認知度につい

て尋ねた調査では、教育や保育に関わる専門職に対しておこなった調査結果に比べ、発達障害に関する用語の認知度は低かった」と報告している。そして、「社会の中で適応するには障害のある本人や家族、彼らに関わる専門家の理解だけではなく、一般社会の人々の認識がどのようなものであるのかが大変重要」であり、「彼らが生きる社会における社会受容を高めることが必要である」と指摘している。

筆者が所属している大学には、教育や保育、福祉に関わる専門職を目指す学生もいれば、教育や障害者に対する専門領域のことを学ぶ機会のない学生も多く在籍する。このような、大学卒業後に教育や医療福祉等以外で働く社会人を目指す一般大学生にとっても、障害者とともに生活をする社会や差別のない社会、合理的配慮の必要性について理解を促すことは必要である。制度が変わり社会状況が変化していく中で、近い将来、合理的配慮が当たり前求められる社会に出ていく大学生の時期に、障害の理解・啓発のための講義や実践は必要な知識であり、求められる資質であると考える。

そこで、本研究では、一般大学生にとって合理的配慮の知識や障害への理解促進に役立つ講義内容や方法について検討する。特に、障害者のコミュニケーションについての講義の中で手話実技による授業を行うことの効果、また、具体的にどのような方法が有効であるのかについて、受講学生の意識の変容や感想を通して検討することを目的とする。

## II. 方法

### 1. 講義の概要

今回対象とする講義は、筆者が担当した一般教養科目「現代と教育」である。

「現代と教育」という講義の位置付け上、講義のねらいとして教育の部分における「特別支援教育」をあげているが、広く「合理的配慮の知識」や「障害への理解促進」を含めた目標として計画した講義である。

講義の概要は次のとおりである。

#### (1) 授業のねらい

障害に応じたコミュニケーション方法や手話の学びを通して、特別支援教育への関心を高める

#### (2) 達成目標

- ・障害のある人とのコミュニケーションの基本的な考え方について理解する
- ・聴覚障害者のコミュニケーション手段のひとつである手話を覚える

### (3) 授業計画

- 第1回 ガイダンス（特別支援教育とは）
- 第2回 特別支援教育の成り立ちと理念  
－障害のある子どもの教育について－
- 第3回 障害のある人への合理的配慮  
－合理的配慮と障害者差別解消法－
- 第4回 障害のある人とのより良い  
コミュニケーション（視覚障害等）
- 第5回 障害のある人とのより良い  
コミュニケーション（知的障害等）
- 第6回 聴覚障害者とのコミュニケーション、  
手話の成り立ち
- 第7回 手話実技①（指文字）
- 第8回 手話実技②（簡単な挨拶）
- 第9回 手話実技③（自己紹介）
- 第10回 手話実技④（場所を表す言葉）
- 第11回 手話実技⑤（食べ物を表す言葉）
- 第12回 手話実技⑥（身近な事象を表す言葉）
- 第13回 手話実技⑦（感情を表す言葉）
- 第14回 手話実技⑧（病院や公共施設の受付を想定  
したやりとり）
- 第15回 手話実技総集編・まとめ

## 2. 調査対象

2016年4月～7月において筆者が担当する講義を受講した学生130名を対象とし、講義終了時に調査を実施した。

調査回答者の概要について表1に示す。調査対象者の性別は、男性81名（62%）、女性49名（38%）であり、在籍学部の内訳は、経済学部40名（31%）、理学部43名（33%）、工学部47名（36%）であった。学年は全員が1年生であった。

将来の希望職種については、「分からない」と答えた学生が45名（35%）と最も多かった。次いで、「会社員」29名（22%）、「公務員」23名（18%）、「教員」17名（13%）、「研究者」10名（8%）であった。

「現代と教育」という講義ではあるが、教員志望は少なく、教員以外の職を希望している割合が高かった。

表1 回答者について

		(n=130)	
		人数(人)	割合(%)
性別	男	81	62
	女	49	38
学部	経済学部	40	31
	理学部	43	33
	工学部	47	36
将来の希望	教員	17	13
	公務員	23	18
	会社員	29	22
	研究者	10	8
	分からない	45	35
	その他	8	6

### 3. 調査手続き

2016年7月に、無記名式・自記式の質問紙調査を行った。調査者の担当する講義の終了後に調査協力を求め、その場での回答を依頼した。調査への協力は任意であること、記名は不要であること、調査内容は成績とは無関係であることを口頭にて説明し、退出時に回収箱に投函する形をとった。

### 4. 調査項目

調査内容は、以下に示す6つの大項目の中に具体的な内容として小項目を設定して提示した。

- ①回答者について
- ②講義履修の動機
- ③特別支援教育や障害者のコミュニケーションに対する、履修前後における意識の変化
- ④手話実技を通した講義内容
- ⑤役立つ講義の方法
- ⑥その他意見

### 5. 分析手順

「①回答者について」「②講義履修の動機」「③特別支援教育や障害者のコミュニケーションに対する、履修前後における意識の変化」「④手話実技を通した講義内容」「⑤役立つ講義の方法」については回答ごとの人数や割合を算出して比較した。「⑥その他意見」については、自由記述の内容をカテゴリーに分類した。

## Ⅲ. 結果と考察

### 1. 講義履修の動機について

「講義を履修した動機」について、結果を図1に示す。「内容に関心があったから」が最も多く56名(43%)であった。一方、「ただ何となく」30名(23%)、「第一希望の講義の抽選に外れたから」18名(14%)、「友人が履修したから」15名(12%)など、積極的とは言えない動機も多く、それらを合わせると74名(57%)であった。

履修学生が、経済学部、理学部、工学部の学生であったことや、将来の希望職種が教員等以外である学生が多いことなどから、消極的な動機で履修をした学生が多かったと考えられる。

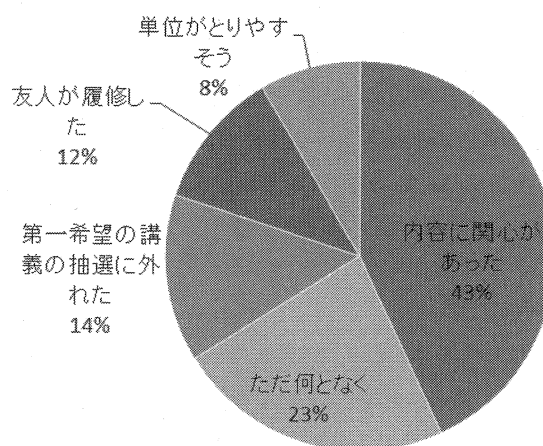


図1 講義を履修した動機

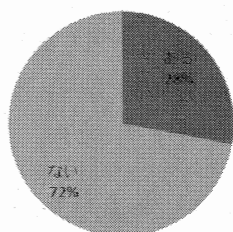
### 2. 特別支援教育や障害者のコミュニケーションに対する、履修前後における意識の変化について

講義開始時4月と講義終了時7月における、「聴覚障害への関心」や「手話への関心」、「特別支援教育への関心」については、図2に示す通りであった。

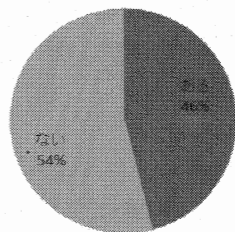
講義開始4月の時点では「聴覚障害への関心がある」37名(28%)、「手話への関心がある」60名(46%)、「特別支援教育への関心がある」31名(24%)であった。「手話への関心がある」割合が若干高いものの半数には満たず、他は3割以下であることから、総じて関心の低さがうかがえた。この結果は、講義履修の動機において積極的な理由が半数に満たなかったこととも関連していると考えられる。

講義終了時7月時点では、「聴覚障害への関心がある」92名(71%)、「手話への関心がある」113名(87%)、「特別支援教育への関心がある」71名(55%)であり、いずれも半数を超え、4月と比較して関心をもつ学生の割合が高まった。

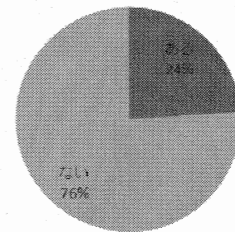
聴覚障害への関心(4月)



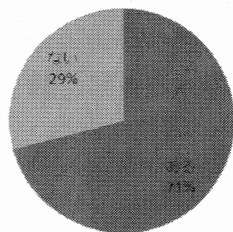
手話への関心(4月)



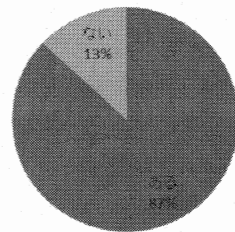
特別支援教育への関心(4月)



聴覚障害への関心(7月)



手話への関心(7月)



特別支援教育への関心(7月)

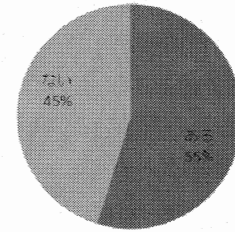


図2 履修前後における学生の意識の変化

表2 講義についての感想と今後したいこと

		(複数回答)	
		人数(人)	割合(%)
感想	手話を知ることができた	125	96
	聴覚障害について知ることができた	32	25
	特別支援教育について知ることができた	13	10
	難しかった	25	19
	予想していた内容と違っていた	7	5
	関心がなかった	4	3
	その他	4	3
今後したいこと	もっと手話を覚えたい	81	62
	障害のある人とコミュニケーションをとりたい	46	35
	障害について知りたい	20	15
	その他	2	2

表3 役立つ講義の方法

(複数回答)		
	人数(人)	割合(%)
実技(手話)	111	85
グループでの活動	83	64
DVD視聴を通した活動	33	25
発表の機会が多い	29	22
シャトルカード	20	15
配布資料	15	12

### 3. 手話実技を通した講義内容について

手話実技を通した講義についての感想を問う質問に対しては、複数回答にて回答を得た。結果を表2に示す。

よかったこととしては「手話を知ることができた」125名(96%)が最も多かった。次いで、「聴覚障害について知ることができた」32名(25%)、「特別支援教育について知ることができた」13名(10%)であった。

一方、「難しかった」25名(19%)、「予想していた内容と違っていた」7名(5%)、「関心がなかった」4名(3%)との回答もみられた。障害者のコミュニケーションや手話への関心をもつことができないまま受講していた学生がいたことは、講義履修の積極的動機の低さを考慮しても講義内容の検討に関して課題が残ると考えられる。

また、今後してみたいことを問う質問に対する回答は、「もっと手話を覚えたい」81名(62%)、「障害のある人とコミュニケーションをとりたい」46名(35%)、「障害について知りたい」20名(15%)であった。手話実技を通した講義を通して手話への関心や興味が高まり、講義時間内にとどまらず、もっと覚えたいという意欲や実際に障害のある人とコミュニケーションをとりたいという意欲の高まりにつながったことがうかがえた。

### 4. 役立った講義の方法について

「役立った講義の方法」の結果について、結果を表3に示す。

講義の方法としてよかったことは、「実技(手話)」111名(85%)が最も多かった。次いで、「グループでの活動」83名(65%)であり、いずれも半数を超えた。

その他は「DVD視聴を通した活動」33名(25%)、「発表の機会が多い」29名(22%)であり、2割を超える学生がよかったと回答した。少数ではあるが、「シャトルカード」20名(15%)、「配布資料」15名(12%)がよかったという回答もみられた。

#### (1) 手話実技について

「手話実技」がよかったとする回答に関する記述には、「楽しかった」や「上手になるのがわかり嬉しかった」などがみられた。楽しみながら行なった実技が学生の関心を高めることに役立ち、実技を通して上達を実感できた点をよかった要因としてとらえていることがうかがえる。また、手話実技を伴う学習が障害に関

する理解を促進する一助となっている可能性があるかと推察される。

#### (2) グループでの活動について

本講義では、手話実技を行うにあたり、毎時間グループで発表・練習・確認し合う「グループでの活動」を取り入れて実施した。「グループでの活動」がよかったとする回答に関する記述には、「人前で発表することに抵抗がなくなった」や「友達の手話を見ることで勉強になった」などの記述がみられた。

#### (3) シャトルカードについて

次に、本講義では、学生の学習の記録や教員とのやり取りを目的として「シャトルカード」を活用した。毎回の「シャトルカード」に書かれた内容は、「〇〇のサークルに所属しています。〇〇は手話でどのように表すのか知りたいです」や「週末に〇〇(観光地)に行きました。〇〇は手話でどのように表すのか知りたいです」等の質問が日常的に多く記入されており、新しい手話を覚えたい、伝えたいという関心が育っていることを読み取ることができた。

また、「シャトルカード」がよかったとする回答に関する記述には、「シャトルカードに学習の内容を記録することで学習内容を整理することができた」や「担当者とのやり取りやコメントがあることで学習意欲が高まった」、「質問を気軽に書くことができた」などがあげられた。質問や意欲を伝える手段としてシャトルカードが活用されることで、学習への関心や意欲向上につながることがうかがえる。

#### (4) DVD視聴を通した活動について

「DVD視聴を通した活動」では、聴覚障害者の日常会話や楽しい表現を学ぶ一つの方法として、手話通訳者や聴覚障害者による手話講座や手話スピーチ、手話コーラス等を視聴する機会を継続的に設定した。

「DVD視聴を通した活動」がよかったとする回答に関する記述には、「手話を覚えることに対して難しいイメージだったが、楽しく覚えられそう」や「DVDに登場する先生の手話が素敵で楽しみ」という記述がみられた。

加えて、手話ができる大学生に特別講師として授業に参加してもらい、手話で質問や会話をする機会も設定した。これについては「身近な人が自然に手話をする様子を見てすごいと思った」や「尊敬した」、「自分も頑張ろうと思った」等の記述がみられた。

DVDによる手話講座や講師の活用によって、手話への関心が高まり、手話を使ったコミュニケーションをより身近に感じることもできたと考えられる。

## 5. 自由記述から

7割程度の学生から自由記述が得られた。自由記述の内容は大きく次の4つのカテゴリーに分類された。カテゴリー(1)「障害への理解・関心」、(2)「実生活への活用」、(3)「手話への関心」、(4)「自分自身の新しい学び」である。カテゴリーごとの具体的記述内容をいくつか抜粋して表4に示す。

手話への関心が高まったことや、身に付けた手話を日常生活にも取り入れようとする意欲が読み取れる。また、手話の学習を通して生活の中で障害者に目を向けることや自分にできることを考えようとする気持ちの高まりもうかがえた。

表4 学生の自由記述の内容 (一部抜粋)

<p>(1)障害への理解・関心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・合理的配慮について知ることができた</li> <li>・手話が必要なのだとわかった</li> <li>・聴覚障害などについて、普段の自分なら絶対に考えないような事について考えるようになった</li> <li>・駅で手話で会話をしている人を見かけた。手話の大切さを改めて感じた</li> </ul>
<p>(2)実生活への活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手話を日常生活でも使えるようになりたい</li> <li>・日常生活において、今まで以上に周りを見て行動するようになった</li> <li>・私が手話を使えたら、聴覚障害の人と接する機会があったら会話をすることができる</li> <li>・日常会話や簡単な自己紹介は自信をもってできるようになった</li> <li>・障害のある方とコミュニケーションをとっていききたい</li> <li>・アルバイト先でお客様に手話を使う場面があった</li> <li>・1回目は興味はなかったが、15回の講義を終えて、どうやら相手に伝わるのかを考えるようになった</li> <li>・覚えた手話をどこかでいかせる機会があると嬉しい</li> <li>・手話を使う機会があれば積極的に使いたい</li> <li>・聴覚障害のある方と積極的にコミュニケーションをとりたい</li> <li>・親戚の聴覚障害の子と一緒で覚えた手話コースをするのが楽しい</li> </ul>
<p>(3)手話への関心</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・手話に興味をもった</li> <li>・授業をきっかけに手話を勉強したくなった</li> <li>・家族に手話を教えた</li> <li>・今後も手話を積極的に使っていきたい</li> <li>・配布資料を使って自分で復習していきたい</li> <li>・覚えた手話を忘れないようにしたい</li> <li>・手話の本を買った</li> <li>・もっと手話を学びたい</li> <li>・手話を覚えたくて、手話のサークルに入った</li> </ul>
<p>(4)自分自身の新しい学び</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・楽しく学ぶことができた</li> <li>・専門外のことを学ぶ機会ができてよかった</li> <li>・手話ができるようになったことは自分の人生にとってプラス</li> <li>・できることが増えて嬉しい</li> </ul>

## IV. まとめ

今回取り上げた講義のねらいは「障害に応じたコミュニケーション方法や手話の学びを通して、特別支援教育への関心を高める」であり、学生の達成目標は「障害のある人とのコミュニケーションの基本的な考え方について理解する」「聴覚障害者のコミュニケーション手段のひとつである手話を覚える」であった。本調査において「手話を知ることができた」の回答が96%であり、「聴覚障害への関心」が28%から71%に高まった。「手話への関心」が46%から87%に、「特別支援教育への関心」が24%から55%にそれぞれ高まった。このことから、関心が高まるには至らなかった学生がいることへの課題は残るが、本講義の目標である「障害に応じたコミュニケーション方法や手話の学びを通して、特別支援教育への関心を高める」ことは概ね達成できたと考える。

さらに、本研究の目的は「一般大学生にとって合理的配慮の知識や障害への理解促進に役立つ講義内容や方法について検討する。特に、障害者のコミュニケーションについての講義の中で手話実技による授業を行うことの効果、また、具体的にどのような方法が有効であるのかについて、受講学生の意識の変容や感想を通して検討することを目的とする」であった。

調査結果より、講義に加えて聴覚障害者とのコミュニケーションである手話を取り上げて実技の時間を多く取り入れたことにより、学生の聴覚障害者のコミュニケーションや手話そのものに関する知識、関心が高まったと考えられる。又、具体的な方法としては、仲間と学び合うためのグループによる学習形態を取り入れたこと、DVDや同じ学生としての立場での特別講師から学ぶ機会を設けたこと、学生の気づきや小さな質問をやりとりししやすいようにシャトルカードでのやり取りを続けたこと、などが有効な方法の一つとして考えられる。

今後は、講義の学びが、実生活に生かされ、生活の中に根付くためには、どのような内容や方法が望まれるのかについて検討していきたい。また、今回は聴覚障害者のコミュニケーションである手話を中心としたが、様々な障害について分かりやすく理解できるよう工夫をするなど、より広く深い学びや理解につながるような講義や実践のあり方を検討することも必要であると考えられる。

## 引用・参考文献

- 小澤晶子 (2010) 歯科衛生科学生の障害児者に関する意識調査—障害者に関する世論調査との比較—。鶴見大学紀要, 47, 73-77.
- 成田朋子 (2009) 一般大学生に子どもの発達について講義することの意義。名古屋柳城短期大学研究紀要, 31, 57-70.
- 西川崇 (2015) 初めて特別支援教育について学んだ教育学部1年生の印象—講義後の感想レポートの自由記述分析を通して—。長崎大学教育実践総合センター紀要, 14, 253-262.
- 高原光恵・津田芳見 (2012) 一般社会人における発達障害に関する用語の認知度。鳴門教育大学研究紀要, 27, 94-99.
- 都筑繁幸・小田侯朗・青柳まゆみ・岩田吉生・相羽大輔・吉田優英 (2015) 教員養成系大学における障害の理解・啓発および体験学習の実践。藤女子大学紀要, 48, 113-124.